

# 中国の“近代化”と“現代化”

## ——大躍進期の農具改革運動——

た　　ち　　か　　ひろ  
田　　近　　一　　浩

はじめに

- I 大躍進運動の展開と深化
- II “現代化”の主体的契機
- III 大躍進における発展と均衡  
おわりに

は　じ　め　に

1958年に始まる大躍進運動は、それまで支配的だったソ連の影響を排し、第1次5カ年計画期の方  
向を大きく転換させていく、中国現代史の源流  
(=農民の主体性)を再び歴史の表面に浮び上  
がらせる画期的な試みだった。その年の前半は、歴史  
の否定と創出をその過程に統合して、渾沌たる様  
相が中国全土に出現する。「重工業化」を目指し  
て流れていた歴史はその枠をはずされ、農業の問  
題がはじめて本格的に取り上げられる。その試み  
の主体である農民にとっては、さらに農業の基底  
に目を向け、みずからの手と思考で新しい農業を  
模索していかなければならなかった時期である。

模索は、ソ連の経験を直輸入した「高級合作社—  
トラクター」という“理想型”を排し、逆に“遅  
れたもの”と見なされ、傍系に消えていくと考え  
られていた伝統農具を改革するところから始めら  
れた(註1)。いわゆる「下から」という形で、湖北  
省の一農村で自発的に開始されたこの運動は、58  
年3月には全国的規模にまで拡大され、この段階

で農具改革運動は、将来の「現代化」に向けて現  
在採ることができる唯一可能な方法である(註2)、  
と規定される。この規定をどう見るかという問題  
は、結局そこで否定される「近代化」の性格をど  
う考えるかに帰着しよう。もともとアメリカの対  
ソ・対アジア世界戦略の一環という性格をもつ  
「近代化論」では、すべての社会が体制の違いを  
超えて一律に「近代化」を目指す発展過程をたど  
るという、一定のイデオロギーに基づく没価値性  
が主張されている(註3)。のちに見るように、問題  
はイデオロギーの内容にではなく、“遅れた”と  
見なされる社会に自己の立場をそのまま押しつけ  
ていく、基本的には歴史概念上の“近代”で確立  
された合理主義的な思考の形式にある。遅れてい  
ると目される部分(たとえば伝統的農法)を“理想  
型”によって排除していくという場合、第1次5  
カ年計画期にはソ連の方でも、こうした意味での  
「近代化」を中国に適用していたわけである。そ  
れに対して大躍進は、ソ連を目指し、あるいは受  
容する水平的な発展に対して垂直の、中国に独自  
の新たな歴史を切り拓く。“近代”から“現代”  
へと歴史を転換させていく、早発の実践過程と考  
えておくことができよう。

この歴史的発展方向は、農具改革運動が伝統的  
農法の変革を引き起こすまで深化する形で貫ぬか

れる。ふだんの年であれば、日々の農作業は農法の手順にそって、時間的・空間的に緊密な結びつきをもちつつ進行する。今日はどの畑に種を播き、どここの畑の草を取る、と。定式化していたこの流れは流動化し、旧いものから新しいものへと変質しつつ、同時に“近代”から“現代”へと加速されつつ、目まぐるしく展開していった。農具改革のためのあらゆる着想、あらゆる試みが直接農作業の場で実行に移され、しかも誰にも、その結果はわからないという時期であった。この期間はきわめて短かく、58年3月に始まり、6月までと考えられる。7月には運動の組織化が計られ、大躍進運動はこの時点で、均衡へと急転回する。

大躍進の全体像はこの発展と均衡の両側面から浮び上がってくるのであるが、本稿では歴史的発展の傾向が明瞭に現われる運動初期の問題を取り上げて、残された課題は別稿に譲る。第Ⅰ節では農具改革運動の展開と深化について、第Ⅱ節では「現代化」という形で提起された大躍進運動の性格を問題にする。第Ⅲ節は、以上で問題にする“近代”の性格との対置で、新式農具を生み出す伝統的農法の動態的な特質を考察する。ここから引き出されるいくつかの結論については次稿に予定し、最後は新式農具の事例を紹介するにとどめた。

(注1) 小島麗逸「大躍進政策の再評価」(『アジア経済』1967年12月) 12—13ページ。

(注2) 『人民日報』1958年3月22日。

(注3) 日高六郎「日本の近代化」(『現代のエスプリ』1963年9月) 16—17ページ。

## I 大躍進運動の展開と深化

### 1. 農具改革運動の展開

1958年3月3日、『人民日報』の一面に湖北省当陽県の事例として、水利工具を改革していく跑馬郷が始まった試みが全县に推し広げられ、やがて

は運搬手段、生産手段の改革にまで発展して現在進行中であるという記事が載せられている。跑馬郷の大衆討議の中から生まれた運動の萌芽が、全国的な規模で展開され完成されていく、その最初の契機であった。運動の祖形において中心となったのは、おりから進められていた冬期の水利建設現場における土砂の運搬を、モッコから一輪車に切り換えるという簡単なものだったが、注目されるのはその展開の早さである。最初の討議から跑馬全郷の切り換え完了まで2・3日、その試みを各郷の幹部が参観して全县に普及するのに5日間。そして約ひと月後の3月の下旬には、「現在各地の農村において、大衆を主体とした生産工具の改革運動が進行中である」として、モッコに代わる運搬車、ロープによる運搬、木製の地固め機や起重機、水車を動力とする運搬、井戸用の掘さく機、あるいは各種の揚水機、草刈機、苗間の除草機などの改良工具が紹介されている(注1)。水利建設に関する改良工具はほぼ出そろい、さらに春の農作業に向けてのいくつかの農具改革の試みへと、この時期運動は大きな展開を示す。単なる改良といった域を超えて農村生活のすべてに深刻な影響を与えつつ、やがて8月の人民公社決議へと昇華されていくのである。

この運動の背景をなす、史上はじめての規模をもつ水利灌漑建設は、合作社化運動を基盤に56年から推進されていた小型の水利建設を継承している(注2)。この間、莫大な投資を必要とする大型のプロジェクトか、それとも中・小型の水利を主とするのかをめぐって議論の対立があったという(注3)。中・小型の水利建設とは、河水を多数の連なった溜池に導入して、洪水時の氾濫をそこに吸収するとともに、その水を灌漑に利用するという考え方である。この方法は、何十年に一度という大

水害はともかく、経常の洪水であれば十分消化可能である。それよりも、問題は排水である。溜池の水は常時には灌漑用水として利用する計画だったが、それから先の、排水網の整備が空白にされていた。華北のアルカリ地は2400万ヘクタールに達し、その他少なからぬアルカリ化し易い耕地が分布する<sup>(注4)</sup>。こうした地では、不完全な灌漑はかえってアルカリ化を促進する。不断の水分の蒸発は、伝統的な労・鋤（表土を攪拌し鎮圧することによって毛細管現象を抑える）に頼るしか防ぎようがないからである。鋤についてはのちに問題にするが、上述との関連で、早くも大躍進の最中に次生アルカリ化に対して警告が出され、排水溝（明渠）の建設が呼びかけられていることが注目される<sup>(注5)</sup>。低地ではもちろん涝害が心配である。

こうした問題を孕みつつも、水利灌漑建設は57年10月から翌年の春にかけて、連日平均6300万人以上の動員という大規模な形で進められた<sup>(注6)</sup>。この結果引き起こされたのは深刻な労働力不足である。農民はつぎのようにいって嘆いたという。「誰が穀物の多いことを願わないことがあろうか。ただ、肥料を集め施肥するには人が要る。井戸を掘り、水利建設をするには人が要る。精耕細作には人が要る。一言でいえば、この人手不足をどうしたらいいのかということだ」。山西省沁県先峰合作社の農民の話である<sup>(注7)</sup>。この合作社は、男女の労働力・半労働力が115人、常時農作業に参加できるのは40数人、1人当りの耕地面積は25畝（ム一。以下同じ）である。労働力不足によってつぎのような事態が出現したという。「去年は100畝あまりの耕地が播種されず、1000担あまりの肥料が施肥されず、3畝余の豆田が全然耕やされなかった。今年の農・林・牧・副業の計画では総計2万9800日の労働日が必要となる。しかし男性労働

力を平均300日、女性労働力を100日とすると、総計2万3300日。6500日が不足する。合作社党支部と管理委員会の計算したところでは、140畝の耕地が荒廃し、今年の緑化・水利建設も計画を下回ることになる」。すでに昨年中の積肥運動や水利灌漑建設によって、農業経営の粗放化が進行していたことを知る。しかも年が明けて、建設の規模は日増しに大きくなる。その結果この合作社で採用されたのは、労働力の再編を中心とする、11項目の措置であった<sup>(注8)</sup>。

いうまでもなく日々の農作業は、農業技術や農村生活の全体とかかわって、それらを整合的・有機的に体系化し、農法としての一定の均衡を維持していこうとする、強い内的な必然性をもっている。水利灌漑建設は、基礎投資として農業の基底を高次元へ移行させる試みであったが、その発展過程の一方で、当然農法体系としての均衡を回復しようとする作用が働いてくる。さきの農民の嘆きはその端的な現われであるが、見方を変えればそれは、伝統的農法の体系内に長い間眠り続けてきた発展の諸契機が、水利灌漑建設をきっかけに一気に胎動し始め、体系としての均衡状態の破れ目から将来の方向が垣間見えだしたということでもある。少なくとも春の農作業を目前にして、農法は“発展の側面”と“均衡の側面”に分解し、相互に対立状態に入る。

先峰合作社がそうであったように、この対立から生ずる労働力不足を解決するための労働力再編の試みは、農村に既存の諸条件がその極限まで利用されていく姿を如実に示している。この過程についての検討は機会をあらためるが、農村の生活はこの時期、新たな発展と高次元での均衡を目指して、根底から覆えられていく。「経済的・技術的要因で、既存の農村（農業だけではない）の秩序を

全局にわたって変革していかないと、水利・積肥運動それ自体が進展しにくいという事情がある。たとえば、水利運動は農業の技術的関連性から必然的に施肥の増大を要求する。当時の化学肥料の僅少な状態では、有機肥料の取得運動へと発展せざるを得ない。何百年も掘り起していない土間や庭の土堀り、溝堀り、便所の建設、家畜の放し飼いから囲い飼いなどを含んだ、あらゆる積肥運動が、水利運動にわずかにおくれて展開されることになる。便所作りや家畜の囲い飼いは、たいへんな生活習慣上の変化とならざるをえない」(註9)。

そして58年春、運動は新たな局面を迎える。「合理的に労働力を組織して、充分大衆の積極性を發揮させるのは、労働力不足の矛盾を解決する方法である。ただし、この方法はあまり多いとはいえない。重要な方法は農具を改革するところにある。湖北省襄陽県の薛心旺たちは、水稻播種機を創って、手播の10倍の効率を上げた。こんなことは今までなかったことである。こうした工具を使えば、1人で10人分の農作業ができ、1日に10人分の作業ができる。作業量の多いこと、時間が緊急であること、労働力不足であることを解決する最もよい方法ではないだろうか」(傍点引用者)。3月14日の『人民日報』の一隅に、各地の状況を報告しつつ小さく出されたこの意見は、3月22日と31日の2度にわたって、ただちに社説で追認されることになる。すなわち、「われわれは単に大衆の情熱とか、労働を強化するとかに頼るだけであってはならない。各種の具体的措置が必須であり、特に技術革新を推し進める必要がある。そのうえではじめて、生産大躍進を実現する保証が得られる。生産工具の改革という大衆運動のもっている重要な意味はこの点にある」と。跑馬郷の大衆討議から生まれ、3月初旬に紹介されるやたちまち全国

に広がった農具改革運動は、ここに技術改革として方向づけられ、「新たな農業技術革命に帰着するもの」という展望を与えられる。この段階で、「工具改革」という言葉は、農具も含めて広く「生産工具改革」とされている。春の農作業を目前にして、農村諸条件の変革、労働力再編成によってもおこる労働力不足の、その最後の解決策として、新たに農具の技術改革が取り上げられる切迫した事情を理解することができる。

逆にいえばそれは、新式農具の農村への導入には、農村に既存の諸条件の根底からの変革を前提としたということである。伝統的農法の体系内に長い間規定されていた農具に手を加えるということは、想像以上に、ある意味では新しい技術を創り出す以上にたいへんなことである。既存の諸条件がその限界まで利用され、伝統的農法の枠が破られたところにおいてのみ、伝統農具の改良(モデルを前提とする)から新式農具創出への展開が可能となったのである。

## 2. 運動の深化と伝統的農法の変革

大躍進以前の段階で新式農具に対応するのは、ソ連の経験を導入して奨励された新式畜力農具である。その性格はのちに問題にするとして、ここではそれが農具改革運動の中で変質していく過程を通じて、新式農具として結実していく伝統的農法の変革過程を見ていくことにしよう。

新式畜力農具の中で重要な意味をもつのは双輪双鋤犁である。名前の通り、鉄製の大きな両輪と、横に並んだ二つの犁鋤をもち、耕深を調節できる。この犁はソ連から導入後、一定の試験・奨励段階を経て、55～56年に大量に普及されたが、56年後半から57年上半期に、犁体が重いことからくるさまざまな批判が出され、南方の水田地帯では積極的に使用しようとはせず、北方の少なからぬ

畑地でも普及がとまったという経緯をもつ<sup>(注10)</sup>。その後も浙江省、四川省、安徽省などの一部で使用が続けられたといわれるが<sup>(注11)</sup>、58年に入って間もなく、その深耕性能に関連して大々的な再評価を受ける。中型と小型の双鋤犁ならばそのまま使用でき、泥脚20～30センチなら鉄輪を木製にし、上部を若干改裝する、あるいはフロート（木施肥）をつけるだけで十分使用に耐える<sup>(注12)</sup>と。

この再評価に続いて、犁体に根本的な改革の手が加えられる。この時期の改革例は14種あると伝えられるが<sup>(注13)</sup>、知りえた限りでは、いずれも並列であった犁鋤を前後に配し、後鋤の耕深をさらに深くする犁体への創型である。

たとえば、河南省長葛県第一農業社で創られたものは、前鋤の耕深が26センチ、後鋤はそれよりさらに23センチ深く、2頭から3頭牽きで耕深50センチ、1日3畝の耕耘が可能という<sup>(注14)</sup>。両輪ははずしてあり、「通常の新式歩とよく似ている」と指摘してある。新式歩犁の犁体に、双鋤犁の犁鋤をつけたものと考えてもよい。

また山東省平原県供鎮社の技術員張新元の設計したものは、2頭牽きで耕深26センチ、3頭牽きで33センチ。1日6畝が可耕という<sup>(注15)</sup>。

陝西省渭南県羅劉社の農民劉恒傑の創出したものは、前鋤の耕深が13センチ、後鋤はさらに23センチ、2頭牽きで33センチから40センチ、1日可耕3畝2分という<sup>(注16)</sup>。劉恒傑はこのほかにもいろいろなものを創案しており、のちに紹介する。

双輪双鋤犁の再評価は浙江省で開始され<sup>(注17)</sup>、華中・華南の水田地帯を中心に積極的に進められたが、結局北方の広域の旱作地に適合しただけであったという<sup>(注18)</sup>。しかし北方旱地に深耕犁が定着したという事実は、一面ではたいへんな成果である。この点に関して、しばらく農法の歴史を遡

ってみることにしよう。

華北畑作地帯における伝統的農法の発展は、西山武一氏によって、つぎのような経過をたどることが明らかにされている。すなわち、伝統的農法が基本的に定式化された『齊民要術』（賈思勰著。後魏末年ないし東魏初年、530～550年間に成立）での耐旱畑作技法の段階では、小麦はまだ下田の作物だった。それが近世（宋・元）に無施肥・無灌漑地の広大な高地にのぼりえたのは、耕耙過程の革新強化による深耕の実現によって十分な地沢が確保されたことと、畑作においても施肥が強化されたためである<sup>(注19)</sup>。この革新強化とは、第1段階が双牛大犁による深耕の実現、第2段階が堀り起こされた巨大な耕纏（土くれ）を砕く鉄齒<sup>ツース・ハロウ</sup>・耙の導入であり、『要術』での犁耕・勞<sup>ニツト・ヘロウ</sup>の2段階から、大犁・鉄齒耙・勞という3段階への発展を指す。『要術』の段階では、耕深が浅いことによって勞が表土の攪拌（細碎鎮圧）の機能をはたしたのに対し、深耕・細耙・熟勞の和土技法の展開は、耕土層の十分な地沢の確保を可能ならしめたのである<sup>(注20)</sup>。

華北でのこうした発展の一方で、『要術』で定式化された農法は、唐末以降北方を凌いで隆盛をみる江南水田地帯の稲作技法にも継承される。そこに展開する農法においては、灌漑水はその土壌粉碎作用によって「耕耘に代替する機能」をもつ。この機能は逆に、犁耕体系の発達を阻止して手播・手耨耕を農法の支柱たらしめ、かくして「本来東アジア乾地農法に規定さるべき本質＝手耨耕は、水田農法においてその極地に達する」<sup>(注21)</sup>。伝統的農法は、ここにその完成された姿を見せたあと、明末清初を境に長い停滞に入る。清朝以降は農具の発展はもはや見られず、主として灌漑の発展に支えられたという<sup>(注22)</sup>。けだし、完成された技法の展開過程である。

大躍進における水利灌漑建設は、こうした伝統的農法の完成、したがって一面では停滞、を大きく脱却しようという意図をもつのであるが、以上の考察からこの水利灌漑とは、伝統的農法の体系内にいわば“偉大なスキ”として、歴史的にその本質を規定されきたものであることを知る。すなわちその展開過程には、深耕犁創出に向かわざるをえない必然性がある。ともともとから内蔵されていたわけである。春の耕起の段階で、双鋤犁をはじめ新式歩犁（新式畜力農具の一つ）や山地犁などの犁体がつぎつぎと深耕犁へ改革されていく光景は、それ自体が新式農具創出の過程であると同時に、いままで伝統的という枠内に閉じ込められていた発展の諸契機をそこに結実せしめていく、伝統的農法の継承過程でもあった。そして双輪双鋤犁が華北旱作地の広域にわたって定着したという事実は、大躍進においてほぼ一尺余の深耕が実施段階に入り、伝統的農法の発展方向である深耕の、その長い間望まれていた目標がようやく達成されたことを示す（深耕が大規模に実施されるのは59年であり、それを前提として全面的に多肥・密植が試みられる）。「プラウ一尺深耕が実現するならば、華北の耕地は従来の二倍の容積、二倍の保水量をもち、高田旱燥の脅威はほとんど解消する」（注23）といえるのである。

ところで以上の農法の発展は、<sup>ハツ</sup> 鋤・鋤という、耕起後の保水のための鎮圧過程をも不必要ならしめたわけではない。特に、中国農法において独特の役割をはたす鋤の機能（保水・除草・培土）（注24）は中耕除草の段階で、なおその意義を失うことはなかった。中耕除草作業の改革は大躍進ではじめて試みられ、その中心になったのは手鋤を機械化した「三齒耘鋤」である。

深耕犁導入には、深耕強化に伴う和土技法の革

新が必要となるのはここに見た通りであるが、さらにそのあと、この過程が中耕除草段階での精耕細作とどう関連するのかが問題となってくる。この点について熊代幸雄氏は、農業機械化のうえに精耕細作の展開する形が、伝統的農法をもつ人口圧力の強い国々では必然的な発展の方向である、との考え方を提示されている。すなわち機械化を前提とした深耕・密植という単位収量増大の方向を空間的に編成し、最終的に完結させるのが精耕細作である（「空間編成」）。むしろこの方向は、「西欧農法では高度機械化段階の超輪栽農法にその展開の兆しがある」（注25）と。単位収量増大の方向とは、言い換えれば人為的に農法体系の空間を緊密化すること、あるいは相対的に、内部に向かって空間を拡大することを意味する。この拡大した空間を維持し、内的に系列化し、体系としての必然性を明確にしていくのが精耕細作の役割である。ないしは個々の意味を貫ぬく、空間に秩序を与える時間としての役割である。のちに検討するように、農法はこの両者を体系として定式化することによって成立する。拡大された空間がそこに固有の時間の流れを伴うのは、農業が自然状態を脱して以来の本来的な発展過程と考えることができよう。

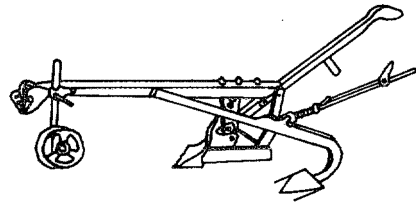
こうした限定を置いたうえで、深耕犁と関連して注目されるのは、大躍進におけるさまざまな耙の創出である。名前だけを列挙しておけば、「単滾双柱多齒碎土耙」、「単滾躁耙」（注26）、「斜齒行子耙」（注27）、「水田円盤齒滾耙両用器」（注28）、「蒲滾躁耙」（注29）など。この円盤齒はディスクハロウの小型のものとも考えられ、さらにこの段階で中耕除草機はまだ創型中であつたが、手鋤を大鋤にする、草刈・収穫用の小鎌を大鎌にするなどの運動が進められていた（注30）。その他、その後に姿を見せる播種機、田植機、収穫機の創型、石臼の動

力化などとも合わせて、大躍進農具改革の試みは、ここに一貫した技術系列に位置づけて把握することが可能である。

もともと新式農具は、水利灌漑建設によって引き起こされた労働力不足を解決するためという、農法体系の発展と均衡への分解・対立傾向を解消する性格をもつ。一方は深耕犁導入に対応する、生産手段の技術的構成（生産手段の分量と労働力の分量の比）を高め、農作業の労働生産性を高める発展の側面、他方はその実現をまって体系の破綻を乗り越える均衡の側面とを統合する、両者の接点に位置づけられる性格である。伝統的農法発展の方向は、それが新式農具につぎつぎに実現されていくとともに、個別の体型を介して、それらを横に貫ぬく全体<sup>・</sup>の方向として、伝統的な精耕細作の役割を継承する均衡の方向を生み出すのである。

次章で取り上げるように大躍進における農法変革の試みは、双輪双鋤犁からトラクターへという単線的な発展過程はたどらず、逆にそこで切り捨てられる運命にあった伝統農具を改革するところから出発する。たとえば双鋤犁から改革される深耕犁は、第1、2図に見られるように、新式歩犁からの改革例と同じ形となる。新式歩犁は在来犁改良のモデルである。その体型は双鋤犁と在来犁の特長、すなわち双鋤犁の深耕性と在来犁の速耕

第2図 新式歩犁から改革された深耕犁



（出所）『人民日報』 1958年9月12日。

・軽便性<sup>(注31)</sup>とを継承し、発展と均衡の二方向をその犁体に統合して、伝統的農法改革の基本線上に創型されたものと考えることができる。

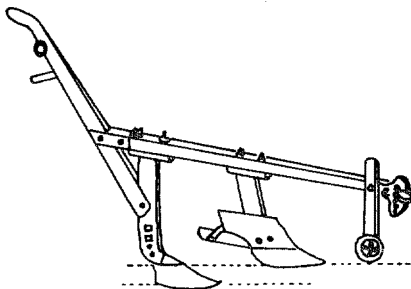
この体型について、両者の優れた部分だけを取り出して組合わせたもの（すなわち改良）と単純に考えることのできない理由については次章で問題にしよう。大躍進以前の段階での双鋤犁と在来犁は、一方が肯定されれば他方は全面的に否定されるという関係にあった。それぞれを内包して両者の背後に確立していたソ連型近代農業と伝統的農法とが、それだけ絶対的なものだったわけである。そこに改革の手が加えられ、新しい犁体が創出されてくるためには、両体系の絶対化が否定され、確立していた前提が無効となったうえで、という屈折した過程が必要だった。

すでに見たように、連日平均動員数6300万人以上の水利灌漑建設は農業経営を粗放化させ、農民の不満を引き起こす。春の農作業を目前にして、労働力不足の根本的な解決策として提起された農具改革運動は、農村諸条件の根底からの変革過程を底流に、一方で深耕犁導入がもたらす空間の拡大、他方で拡大した空間を完結させる精耕細作の、相互に対立する空間的側面と時間的側面との間を大きく揺れ動きつつ進展していくのである。

（注1）『人民日報』 1958年3月22日。

（注2）小島麗逸「大躍進の形成過程」（『アジア経

第1図 双輪双鋤犁から改革された深耕犁



（出所）『人民日報』 1958年4月8日。

済』1969年12月) 56—57ページ。

(注3) 『人民日報』1958年6月23日。

(注4) 山本秀夫『中国農業技術体系の展開』アジア経済研究所 1965年 57ページ。

(注5) 『人民日報』1958年6月18日。

(注6) 『人民日報』1957年12月23日。

(注7) 『人民日報』1958年3月19日。

(注8) ①耕地近くの崖下に穴居を作り、牛や羊をそこで飼う。②手頃なところに脱穀場を作り、その場で推肥を作る。③用具を増やし、改良する。④弁当を作って朝・昼にとどける。⑤山上の耕地では、その近くに家を建てる。⑥村の傍に井戸を掘る。⑦女性労働力を利用する。⑧冬と春には耕地に肥料を担いで行き、夏と秋には作物を担いで帰る。⑨苗の育成・鳥虫害・耕地保全に関しては個人責任制とする。⑩自然の地形を利用する。⑪幹部の農作業への参加。

(注9) 小島「大躍進政策の再評価」19—20ページ。

(注10) 『人民日報』1958年4月16日。

(注11) 『人民日報』1958年3月3日。

(注12) 『人民日報』1958年2月5日、3月2日。

(注13) 『人民日報』1958年3月3日。

(注14) 『人民日報』1958年4月8日。

(注15) 『人民日報』1958年6月16日。

(注16) 『人民日報』1958年6月29日。

(注17) 『人民日報』1958年7月3日。

(注18) 小島麗逸「農業機械、農業工具」(『中国経済の長期展望Ⅲ』アジア経済研究所 1967年) 239—240ページ。

(注19) 西山武『アジアの農法と農業社会』東京大学出版会 1969年 42—43ページ。

(注20) 同上書 112—113ページ。

(注21) 熊代幸雄『比較農法論』御茶の水書房 1969年 303ページ。

(注22) 山本 前掲書 24ページ。

(注23) 西山 前掲書 46ページ。

(注24) 同上書 96—97ページ。

(注25) 熊代 前掲書 655—656ページ。

(注26) 『人民日報』1958年3月23日。

(注27) 『人民日報』1958年3月31日。

(注28) 『人民日報』1958年4月10日。

(注29) 『人民日報』1958年7月16日。

(注30) 『人民日報』1958年3月20日。

(注31) 熊代 前掲書 649ページ。

## Ⅱ “現代化”の主体的契機

### 1. “近代”の性格

伝統的農法の発展方向を継承し、大躍進運動の中で換骨奪胎されて深耕犁として再生する双輪双鉞犁は、本来はソ連の経験を直接導入して普及されたもので、伝統農具から創出されてくる新式農具とはその出自を異にするのみならず、およそ正反対の性格をもっていた。大躍進以前の農具は、伝統農具・新式畜力農具・農業機械の3種に分類されており、この段階での伝統農具は、“遅れたもの”として「しだいに主流から傍系へと移行する」と考えられていた<sup>(注1)</sup>。この主流とは、ソ連の指導による第1次5カ年計画期の「高級合作社—トラクター」という図式を指す。新式畜力農具はこの関連において、すでに確立されている主流にいたる一過程という以上の意味はもたず、伝統農具を排除する形で普及を奨励され、しかもそれ自体が、高くそびえる“理想型”の影の部分でしかなかった。いわば“上から”という形での、あるいはモデルをあらかじめ設定したうえでのその奨励に対して、大躍進の農具改革運動は、逆に遅れた伝統農具から出発する。これこそが将来の「現代化・機械化あるいは電化」にいたる現段階で唯一可能な方法であり、この試み自体が「技術革命である」と規定される<sup>(注2)</sup>。「(双鉞犁改革の)実験や研究には“百花齊放”が必要である。失敗を恐れるな。定型生産(モデルに依る生産)には慎重を要する」<sup>(注3)</sup>。

“理想型”の設定は否定され、ソ連の影響を排して、独自の方向が模索されはじめる大きな転換点であった。



一口に伝統農具の改革とはいえ、それが本格的に追求された場合には、一方に伝統的農法の変革を引き起こし、他方で近代的発展を乗り越える二重の展開過程をたどることになるのは必然的な経緯であろう。大躍進を失敗であったと見るのが今日なお一般的な評価であるが、その試みはそこで考えられているように単に改良の域にとどまるものではなく、伝統農具を“遅れたもの”と規定して確立していた近代合理主義をも覆えす、さらに背後へと展開していく奥行き、運動深化のもう一つの側面、をもっているのである。

詳しく問題にすれば、農具改革運動で使用されている言葉は「現代化」であって、「近代化」ではない。すなわち、「近代化」の対立概念として「現代化」が使われていると一概に言い切ることはいできない。この点について井上清氏は、つぎのように指摘されている。「最新の科学技術の成果を系統的に採用することを、“近代化”あるいは“現代化”というばあいも、ひじょうに多い。つい先日私は中国の北京をおとずれたが、その街々には、“農業の現代化、工業の現代化、国務の現代化、科学技術の現代化”というスローガンが、いたるところにかかげられていた。この“現代化”が“近代化”と日本語に翻訳されている例もみた。“近代化”という概念のこのような使い方は、社会主義国と資本主義国とのべつなく、広くおこなわれているが、このような超歴史的な、たんに最新式化というのと同様の意味の“近代化”と歴史的範疇としての“近代化”とは、はっきり区別されねばならない。歴史的範疇としての“近代化”がどのように定義されるとしても、それは必ず資本主義の形成、発展とむすびつけられていなければならない」(注4)。超歴史的と歴史的の二重の意味を「近代化」がもっているという指摘であるが、

これに対応して「現代化」の方も、この二重の意味を未分化のままに内包し、前者に対しては肯定的に、後者に対しては当然否定的に使用されていたと判断しておきたい。大躍進ではその騒然たる実践過程でさまざまな問題が一挙に展開されていくのであるが、後者の意味、すなわち氏によれば「必ず資本主義の形成、発展とむすびつけられていなければならない」という意味であれば、これは文化大革命、あるいは走資派批判で問題となる基本的な争点に他ならない。超歴史的な意味の歴史的限界が対立の接点になるということであり、大躍進で未分化だった問題が明確にされていく過程である。

ここに後者の意味での「現代化」は、政策レベルの次元を超えて、対概念たる「近代化」を否定するという重大な問題を将来に投げかけている。逆にいえば、将来の方向がなぜ「現代化」という耳慣れない言葉で表現されねばならなかったか、である。“理想像”としてのソ連の影の部分から中国が脱却していく闘いの成果であった新式農具は、同時に近代合理主義に隠されていたさまざまな問題をも、陰の部分から引きずり出す。この点を明らかにするために、最初に「近代合理主義」の母体である“近代(18~19世紀の西欧社会)”の性格を考察し、“近代”から“現代”への転換点に立脚して、大躍進運動の歴史的変革過程を問題にしていくことにしよう。

近代の発展していく過程を具体的に見ていく余裕はないが、以上との関連で近代的発展の限界に重点を置いて、その本質をつぎのように把握しておくことにしよう。

こうした証言がある。「19世紀においては、大ていの人々は、自分の身のまわりのもっともらしい証拠に基づいて、継続的に増大する生産も漸進的

に無限に増大していく需要に吸収されてしまうであろうと信じていた」(注5)(傍点引用者)。各人にとってその世界は、ますます視野が開ける(注6)という形で、どこまでも限りなく、あくまで均質的に拡大していった時代だった。希望に満ちた、あまりに楽天的といってよいこうした世界拡大の結末が第1次大戦であったことは、あらためて指摘するまでもない。

問題となるのは、世界大戦として当然破綻せざるをえなかったこの発展を、当時の大部分の人々が、「自分の身のまわりのもっともらしい証拠」によって限りなきものと信じ込んだ、その絶対的な主観性と、主観をそのまま全体にあてはめていく均質的な世界観についてである。身近な根拠によって、世界が均質的で無限の空間をもっていると信じ込むこの素朴さを、19世紀と片付けるのは容易である。だが、最近まで支配的であった「核抑止力の理論」とは、人類を何回絶滅させようかとして、地球規模の空間をいくつも想定したうえに構築された“現代の神話”ではなかったか。地球規模を超えて発達した現代の科学技術は、宇宙空間に向かうことによって、この数個の地球という空間をも乗り越える。問題はそれが兵器だからというよりも、その拡散的な考え方が近代合理主義の奥深くを貫ぬき、近代的発展の内部を風化させていくところにある。それに伴うエレクトロニクスの発達、交通網の整備とスピード化、近代的生活様式の均質化……、「テクノロジーの発達と高度経済成長は、空間を拡大し、時間を極度に縮めた。というより人間的成熟時間の犠牲において物理的空間の次元をひろげ、その密度を高めた」(注7)と評される今日の発展は、その最先端も含めて、いなむしろそうであればあるほど、近代合理主義の系譜を色濃く継承しているように見える。

一言でいって近代の性格とは、確立された典型が絶対化され、無前提に普遍化されて、均質的にどこまでも拡大していく発展過程をもつ、と要約するのである。

近代から現代への発展、しかも第1次・第2次大戦という2度の破局を経過したうえでの発展は、当然19世紀に支配的だった思考方法を乗り越える努力を契機とするはずだった。それが今日までそのまま持ち越されるという傾向は普通では考えられないことであるが、逆にそこに思考の本質的に皮肉な一面が浮かび上り、現代がかかえている問題の特質を垣間見せる。19世紀から20世紀への変革期には、意識は本来的に社会的なもの(注8)という真理はパラドクスとして作用してくる。少なくともこの場合、観念性にまみれた主観を脱却し、ついで実践へと短絡していくことでは事態のいささかの進展も望みえないことは、広松渉氏の指摘される通りである。近代認識論の「主観—客観」図式には、①主観の「各私性」、②認識の「三項性」、③与件の「内在性」が含意されており、ここにこそ今日の「逼塞状況」を開くために、抜本的に再検討すべき問題構成が孕まれている。「とはいえ、われわれはまだ、この“図式”に根強く捉えられており、今日、それに代えて認識を述定しうべき既成の概念装置を持ち合わせてはいない」(注9)と。

ところで、氏はここでこのための新たな方途を提起されるのであるが、その展開については、なお「各私性」を超え出た時点にとどまっているという限界を指摘しておかなければならない。この点の検討にそって論を進めていくことにしよう。

もともと「主観」ないし「主体」(subjectum)という言葉は、「根底におかれたもの、根底にあるもの」といった「もののあり方」を指す語であっ

て、今日一般に使用される意味をもつにいたるには、普遍的に存在するものの中で人間が中心となっていく、主観（主体）の「近代化」の過程があったという。すなわち主観の確立は近代の達成した重要な成果であったが、しかしこの場合、近世哲学の発展過程にあって、主観という語がわれや個人を中心にするといった「各私的」な主体という意味を伴うのは、本来の意味からいって「変性」であり「偶有的なこと」であって、主流的な哲学体系においては、いずれも変性しない本来の姿が堅持されていた<sup>(注10)</sup>。確立された主体が個であるということでは、必ずしもないのである。

問題はつぎの点にある。現代における歴史の発展は、「各私的」であるかどうかにかかわらず、およそあらゆる主観の手を離れる方向を傾斜していったこと、こうした傾斜は、近代に確立されもはや現代には通用しなくなった主観（主体）にその一因があること、現代科学技術や経済発展のおそらく最良と目されている部分において、そこに最も適合していた近代的な空間拡大の構図がもはや限界にきており、それが今日の「逼塞状況」に現実性を与えているということ、そしてここで主観が問題となる場合、こうした近代の系譜との関連を抜きにすることはできないということである。

広松氏はこの「逼塞状況」を乗り越えるために、「各私的」な主観を超え出た次元での「共同主観性（Intersubjektivität＝間主体性＝共同主体性）」を提起されるのであるが<sup>(注11)</sup>、ここで氏の理論の前提となっている<sup>(注12)</sup>フッサールの「間主観性（相互主観性 Intersubjektivität）」とは、「各私的」であるかどうかには本来無関係な概念であった。フッサールにおいて問題となったのは、近代における「“独断的”客観主義」についてである<sup>(注13)</sup>。“独断”が問題となる場合、「共同主観的」な主観も含め

て、いったん確立した主観を無前提に対象に当てはめていく、そうした近代合理主義に対する根源的な反省から出発することが必須の課題となる。結果としては「各私的」な主観をも超え出るのであるが、広松氏の「共同主観性」が外に向かって展開するのに対して、フッサールの「間主観性」は、反省を契機として内部へと向う。近代で確立された主観そのものに批判の目が向けられるのである。

そしてこのフッサールこそ、一切の判断をいったん中止するという操作によって一時的に主観と客観を同列に置き、ついで分裂している両者の合致を計るという、周知の「現象学的還元」の提唱によって従来の主流哲学に批判を加え<sup>(注14)</sup>、しかもその正統な後継者たることを自他共に許す、19世紀から20世紀、近代から現代への変遷期に生を享けた、哲学華やかかりし時代のおそらく最後の哲学者だった。あらゆる哲学に共通の課題である理性批判を、思想体系の破綻をも顧みず正面から取り上げること、これがフッサール現象学の最初にして最後の課題であった。この試みを、たとえば同じ具体から出発しつつ、思想の体系的な完成を究極の目的とするヘーゲルと対比してみれば、すなわちその思想が精神の絶対的な確立、「世界観」の確立という限りで結局近代の枠を超えるものでなかった<sup>(注15)</sup>ことに対比すれば、その歴史的な位置づけは明らかである。

付言すれば、19世紀のなかばにヘーゲルの思想をいわば逆転させることによって、すでにマルクスが近代の壁を一気に突き破っている。絶対的な観念から具体へという転換によって、その思想は本質的に現代のものである。だが歴史が現代へとその巨歩を進めるにあたっては、近代みずからが自己の限界に目を向け、徹底した反省のもとにその出自を乗り越えていくといった、産みの苦しみ

というべきものが必要だった。主観が「各私的」であるかどうかの点については、この関連で、なお附随的な問題とせざるをえないのである。

近代みずからが近代を超えていく試みの一例として以下にフッサールの現象学を考察し、ついで、原理的ではあるが多分に思弁的なその思想に対して、実践過程としての大躍進における近代超克の試みを見ていくことにしよう。

## 2. 近代超克の思想

フッサール現象学が断片的な形で表明されるのはちょうど世紀の変わり目、1900年の『論理学研究』においてであったが、その構想が基本的に確立されるのは、さまざまな動揺や懐疑を経たうえでの、1907年ゲッティンゲン大学夏学期の講義である。そこで主張されたのは、対象に向う主観の認識がそのままの自然状態では観念性（超越性）をまねがれえないこと、そのためにあらゆる先入見を排除する、「一切の超越者に無効の符号をつける」という反省がすべてに先んじて重視されなければならない、ということであった（注16）。「判断中止（エポケー）」を中心的な手法とするこの理性批判については、メルロ＝ポンティによってつぎのように説明されている。「われわれは徹頭徹尾世界と関係しているからこそ、われわれがこのことに気づく唯一の方法は、このように世界と関係することを中止することであり、あるいはこの運動とのわれわれの共犯関係を拒否することであり、あるいはまた、この運動を作用の外に置くことである。それは常識や自然的態度のもっている諸確信を放棄することではなく、むしろ、これらの確信がまさにあらゆる思惟の前提として自明なものになっており、それと気づかないで通用しているからこそそうするのであり、したがって、それらを喚起しそれとして出現させるためには、われわ

れはそれを一時さし控えなければならないからこそ、そうするのである」（注17）。

しだいに深められていくフッサールの思想そのものをここで取り上げる必要はない。興味を引かれるのは、大部分の人々が「自分の身のまわりのもっともらしい証拠」に基づいて、未来の限りなき発展にいささかの疑問もいだいていなかった20世紀の初頭、みずからに無前提に与えられ、またすでに与えられているものの一切をまず排除してかかるという透徹した反省の努力が、大戦勃発数年前のヨーロッパの一隅で営まれていたという事実についてである。当初フッサールが、現象学のもつこうした歴史的意味をはっきり認識していたとは考えられない。しかし結果においては、最後の著作『危機書』（*Krisis-Arbeit*）に展開されるように、ヨーロッパの「危機」を乗り越えるための試みという性格をはっきりさせる。その思想は、歴史の発展が主観（主体）と調和を保っていた、したがってなお哲学が有効性をもっていた、そうした近代がまさに終焉しようとする際の末期的症状を呈してくる時代背景の中から、一つの必然性をもって生まれてきたものである。周知のように近代は、「われ思う、ゆえにわれ在り」とするデカルトから始まる。そのデカルトから懐疑の方法を継承して確立された「現象学的還元」は、還元を行なう主観それ自体がなお無規定にとどまっていることへの反省によって、のちに非デカルト化への修正をほどこされる（注18）。上述の「間主観性」における他者は、還元を経て純粋な形で取り出されたわれが無規定にとどまる段階を乗り越えるための契機、みずからに批判を加え、「自己自身を客観的に現実化」することによって客観的世界を把握するための契機、という意図のもとに導入されるのである（注19）。

最初から本質的に「超越者」として存在している世界をとらえるためのフッサールみずからのこうした反省は、ますます超越の度を深めていく世界を射程にとらえ、そこに主体的にかかわろうとする、おそらく近代の思想の最後の努力であった。「われ思う」のわれへの、3世紀のちのこの反省をもって近代は幕を閉ざすべきだったであろう。だが現実においては、1933年のヒトラー政権確立後、ユダヤ系であったフッサールは大学を除名され、大学構内への立入り禁止、ドイツ国内での著書の公刊や再版も禁ぜられる。フライブルグにおける彼の生活はしだいに孤独の影を深め、1938年、その最後の病床を見舞い、葬儀に参列するのにさへかなりの勇気がいったということである(注20)。そしてこのナチス政権こそ、民族の血という神話でもってみずからのみずからへの批判を封じつつ、あらゆる面にわたって優れた典型を確立したうえで、異質なものを強権で排除してでもそれらを絶対化して全世界に推し広げようとした、近代の悪しき面を一身に体現した鬼子だったのである。また「大東亜共栄圏」というのはどうか。その理念を絶対化し、各地に強制的に「皇民化」を押しつけていく展開過程は、自分の身のまわりの根拠に基づいて自己を正当化し、それを無前提にどこまでも拡大していった近代の、その末期的状態における断末魔のあがきなのであった。

### 3. 大躍進における主体的契機

必然的に帝国主義的性格を帯びる近代の発展を革命によって覆えし、新たな歴史を切り拓いた中国においては、たとえそれが単なる考え方ということであっても、自己を絶対化して他に押しつけていく態度を、重大な問題として取り上げざるをえない歴史的な背景がある。この点で文化大革命を、近代を超えるという意味での「超近代の試み」

と規定する指摘は(注21)、中国の歴史的発展過程の核心を衝いていると見ることができよう。文革の初期に提起されたのは、現実とその結果を重視する実権派に対しての「造反有理」の考え方だった。問題となったのは、“現実の重視”を絶対化することによって逆に現実が陰の部分になってしまう、そうした思考のパラドクスについてである。文革末期の深刻な事態は、実権派・造反派両者の、それぞれの主張の絶対化から発生したと考えられるが、思考のこの皮肉な一面についてはすでに触れた。そこにおいては、「各私性」を超えて「共同主観性」という観点に立ったとしても、それだけで問題は解決しない。ついで、「共同主観的」に展開していく主観の歴史的限界性が問題となつてこよう。結局この問題は、近代を超えるためにどうしても通過せざるをえない、一方は近代へと回帰し、一方は現代へと通ずる歴史の分岐点に掲げられている、一見簡単な“スフィンクスの謎”(注22)である。

中国がこうした岐路にはじめてさしかかったのは大躍進だった。少なくとも中国は文革終了までその地点にとどまり、じっくり腰をすえてこの問題を考え続けた。簡単にそこを通過してしまうことを許さない文化、それは過去の歴史の遺産であり、重みである。

さて大躍進においては、この間何が問題になったかを多少は推察しうるいくつかの手掛りが、断片的ではあるが農具改革運動の過程で与えられている。伝統的農法の内部から、その枠を破って創出されてくる新式農具は、結果があらかじめ設定されてはいないという言葉の本来の意味での創出であり、その試み自体がすでに、確立した典型のうえに展開される近代合理主義を超克していく過程である。“創出”の主体としてそこに現われる

のは、前もってすべての先入見を離れている、孤独で寡黙な農民の姿である。例を引こう。

山西省大同川里の王盛貴は、柴を背負って歩いていて、大風に会って動けなくなった。この経験から風力水車の着想を得て、1952年春、木材・鉄・皮などの材料を買い、政府から小さい五輪水車を貸与してもらってその製作にかかった。その試みに対して、多くの人は空想だといい、大半の人が気狂い沙汰だとした。妻子は彼がいうことを聞かないので、おこって離婚してしまった。多くの鍛冶屋や大工が相手にしなかったのを、大金を払って引き受けてもらうという状態であった。さていよいよ試験という日には、あの気狂いが一体どんなものを作ったのか見に行こうと、老いも若きも百人以上の人が集まった。風車がまわり出し、水が耕地に流れ出したが、ほんのひととき、タバコを一服するくらいの時間で、風車は大風で飛び散ってしまった。それから1年余りの間、つぎつぎに改良を加えた末に、やっと完成したという(註23)。

陝西省渭南県双王郷羅劉社の劉恒傑は、農具を修理したり改良したりするのに才があり、ここ数年新式農具の研究に没頭していた。しかし家族からは、作物を放ったらかしにしている、邪魔になる、閑なことばかりしているといって批難され、まわりの人々からは皮肉をいわれたという。鉄板を買う金がなかったので、意をつくして鉄工場でわけてもらったあと、村人に笑われるのを避けて暗くなってから家に帰り、その晩夜半になって「加梁機」を創り出した。一種の畝立機である。ところがこれは実験の結果失敗であることがわかり、再び物笑いの種となった。彼は人目を避けて、夜半に耕地で実験を繰り返し、明方近くによくやく完成を見たという(註24)。

大躍進以前の段階での話である。58年春には、

農具改革を試みるつぎのような光景が農村一帯に展開する。「この運動は、農業や水利建設に直接たずさわる農民大衆の中から発生してきたものである。農具創出者の大半は農民であり、農民の中の大工や鍛冶屋であり、何千何万の平凡な労働者である。研究や実験は、耕地で、河原や小川の中で、山の斜面上で進行中である」(註25)。この年の3月から6月にかけては、その後の方向を決定するさまざまな要因が、一斉に、渾沌たる状態で出現した、中国歴史上の大きな転換点であった。解放後の中国においてはじめて、農業生産を含めた形での変革が課題として取り上げられ、もともと農村にあった農民にとっては、前例のないこうした試みの主体として、自らの努力で農業の基底を模索していかなければならなかった時期である。

農民劉恒傑はこういって皮肉られたという。「国営工場はあんなに多いのに、農具用のものがないのは困ったことだ。ひとつあんたが技師になって、例の得意を十分発揮したら?」。国営工場においては、伝統農具は遅れたものとして傍系へ移行すると考えられており、一方農具を改革する新しい試みに対しては、農村から排除されていく運命しか与えられていなかった時点での話である。その段階での試みは農具改革の初発の形態として極端な形で現われるが、同時に大躍進の本質をそれだけ明瞭に映し出す。すなわちそこで問題となったのは、農村に外部的な要因としての“理想型”の絶対化を覆すにとどまらず、さらに農民の生活と思考方法を根底から規定している、農法たる体系の絶対化をも克服することであった。

とはいえ作物を育てるという農業の性格からいって、そこでとられるさまざまな試みは、その成果が直ちに現われるといったものではなかった。この時期の第1次5カ年計画期との段階の差は、

「失敗を恐れるな」という言葉に明らかなように、一言でいえば“結果”に対する考え方の相違にある。農村の内と外とに屹立するソ連型農業と伝統的農法との二重の絶対化を克服していく大躍進運動は、成果が直ちに現われないという農業が問題となる以上、すべての“結果”を前提としないところまで一気に行き着かざるをえなかったと見ることができる。農業の基底を模索する試みは、結果にとらわれない「試行錯誤」の考え方<sup>(注26)</sup>に立ってはいじめて可能だったのであり、その模索は一切の前提抜き、いわば手探りという形をとる。

しかもすでに直ちには成果が現われないという性格そのものが、体系化の必然性を農村に生み出していく要因でもあった。伝統的農法に見られる農作業の手順に関する厳格さは、厳密な手続きによって秋の収穫を確実なものにしようとする、体系によって将来の保障を獲得しようとする重大な意味を担っていた。耕起を終え、種を播き、やがてそれが発芽して豊かな実りをつけることを願う、祈りにも似た農民の気持がそこには込められていたのである。前提を一切設けない形で農業の基底を模索する試みは、この保障機能と真向から対立し、それを根底から覆えす。その展開過程はこうした次元まで深化していき、さらに農法の発生してくる根源にまで遡る。その根源、すなわち個々の農作業を農法として体系化し、同時にその体系から規制を受ける、農村の生活と農民の意識へである。

大躍進の初期において、農法を介してみずからに還るこの試みのはたした役割はつぎの点にあった。いままで親密な関係にあった農法に批判の目を向けること、すでに王盛貴や劉恒傑がそうであったようにその体系から脱却し、それとのかかわりを一時中止して、あまりにも親密であったため明確につかみえなかった本来の姿を振り返ってみ

ること、あるいはソ連を典拠とする“理想型”と伝統的農法との、両者の狭間に身を置くこと、いかなる前提もありえないその地点に一気に移行すること、であった。この試みの行き着く先に人民公社の姿が浮び上がってくるのであるが、この段階ではなお、現実を厳密に規定している伝統的農法を乗り越える努力が続けられていた。新しい農法の模索、新式農具創出の試みである。そしてこの新式農具こそ、双輪双铧犁が再生されてくる過程と同様に、近代的農業と伝統的農法との絶対化を否定し、さらにその否定が反省（理性批判）にまで深化していくところから、まさにそうしたいかなる前提も想定されてはいない地点から創出されてくるのである。伝統的農法からソ連を典拠とする“理想型”への発展が、遅れた伝統農具を傍系へと追いやる近代的な性格をもち、したがって均質的な空間がどこまでも拡大していく水平的な方向をもっていたとすれば、大躍進の試みはその単線的な発展にクサビを打ち込み、拡散的な空間拡大に対していわば垂直の、歴史的な発展という性格をもっていたと見ることができる。この意味でそれは、中国に独自の歴史を切り拓く。このクサビの打ち込まれる過程で、ソ連を典拠とする“理想型”は一掃され、すでに確立されていた前提は無効となった。“理想型”を目指して流れていた自明の歴史はその枠をはずされ、堰を切って中国全土に溢れでる。“一望白水”のもとに残されたのは、みずからの手とみずからの思考、そして矛盾たる様相を呈して一瞬動きを停止するかの、すべてを浸し、すべてを巻き込む歴史の奔流であった。みずからへと回帰し、みずからの出自を乗り越える試みが孤立した形をとるかどうかは、与えられた条件に左右される相対的なものに過ぎない。反省を契機とする、二重の絶対化を克

服しようとする努力は、ある時期には批難され、ある時期には奨励されるという個々の状況を超えて、この時期近代から現代へと歴史を大きく転換させ、“現代”たる性格をもつ人民公社設立の機運を生み出していくのである。

〔注1〕 小島「大躍進政策の再評価」12—13ページ。

〔注2〕 『人民日報』1958年3月22日。

〔注3〕 『人民日報』1958年3月3日。

〔注4〕 井上清「“近代化”への一つのアプローチ」『思想』1963年11月）11—12ページ。

〔注5〕 E・H・カー『ナショナルイズムの発展』みすず書房 1964年 19ページ。

〔注6〕 江口朴郎「帝国主義時代の思想と文化」『世界歴史23』岩波書店 1969年）413ページ。

〔注7〕 永井陽之助「経済秩序における成熟時間」『中央公論』1974年12月）60ページ。

〔注8〕 「ドイツ・イデオロギー」（邦訳『全集3』）26ページ。

〔注9〕 広松渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房 1974年 6—8ページ。「各私性」とは、近代においては主観が常に各個人としての、各私的な「私」の意識として了解されること。「三項性」とは、主観が対象を認識する場合、「意識作用—意識内容—客体自体」という関係をもつと一般に見なされていること。「内在性」とは、認識主観に直接現前するのは意識内容であって、客体自体は間接的にしか把握することができないという考え方を指す。

〔注10〕 桂寿一『近世主体主義の発展と限界』東京大学出版会 1974年 2—3ページ。

〔注11〕 広松 前掲書 18—19ページ。

〔注12〕 広松渉『資本論の哲学』現代評論社 1974年 285ページ。ここでフッサールの用語「Intersubjektivität」の訳語に関し、「共同主観性」ないし形容詞「共同主観的」という言葉は用いておらず、決して“共同主観”なる言葉は用いていない、と付言されている。すなわち氏においては、主観が「各私的なもの」から「共同主観的」に展開していく、「各私性」を超え出る過程が課題となる。それに対して本稿では、主観が“共同主観”として実体化した場合の、歴史的限界性についてを問題にする。あるいは「共同主観的」に展開していく、その過程そのものの歴史的限界について

である。ちなみに「Intersubjektivität」の訳語は、普通には「相互主観性」あるいは「間主観性」である。

〔注13〕 E・フッサール「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」(『世界の名著51』) 中央公論社 1974年 457ページ。

〔注14〕 E・フッサール『現象学の理念』みすず書房 1973年 40—42ページ。

〔注15〕 木田元『現象学』岩波書店 1974年 41ページ。

〔注16〕 フッサール『現象学の理念』16ページ。

〔注17〕 M・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学1』みすず書房 1973年 12ページ。

〔注18〕 新田義弘『現象学とは何か』紀伊国屋書店 1974年 57—58ページ。

〔注19〕 E・フッサール「デカルト的省察」(『世界の名著51』) 中央公論社 1974年 295ページ。

〔注20〕 木田 前掲書 83ページ。

〔注21〕 加々美光行「毛沢東思想考」(『アジア経済』1972年12月) 62ページ。

〔注22〕 答えはもちろん“人間”である。だがそれは、歴史的な規定を受ける具体的な姿で答えられるものでなければ正解とはいえない。

〔注23〕 『人民日報』1958年6月5日。

〔注24〕 『人民日報』1958年3月31日。

〔注25〕 『人民日報』1958年3月22日。

〔注26〕 熊代 前掲書 634ページ。

### III 大躍進における発展と均衡

#### 1. 農法体系の動態的特質

あらゆる前提を無効とするところまで一気に突き進む“試行錯誤”としての大躍進運動は、究極、農村の現実を厳密に規定している農法の根源にまで遡る。新式農具は、“近代”から“現代”への変革の中で一切の前提条件が加熱され流動化されたうえに、新しい歴史の萌芽として創出されていくのである。ところでこの過程で否定されていく、厳密な手続きから生み出される伝統的農法の保障機能とは、なお自然条件の影響を受け易い、生産力水準の低い段階での話であるとも考えられ



るが、しかし近代的发展の事例に明らかなように、高度の生産力水準が達成されたからといって、それをもって近代合理主義の限界、あるいは近代の科学技術の体系硬直化の隘路が克服されるわけではない。もともと生産力の観点からでは覆いえない問題が内在しているといえよう。具体的には、従来の構造分析的な方法が静態論の域を出ない、歴史的发展過程を“重層的”という形でしか扱えない限界が問題となる。それぞれの発展段階を典型として描き出すにとどまるという限りで、現代の理論的水準はいまだ近代の枠を超えてはいないとも見ることができよう。その方法論そのものが本質的に現代への視角を欠いているのである。

少し長くなるが、この点に関する歴史学からの証言を引用しておこう。

「19世紀の末期から第一次大戦にいたる、現代に比較的近い時代の諸思想・諸文化の状況を世界史的な脈絡の中で位置づけることはきわめて困難なことであり、現在なお一般化した叙述の仕方も存在しないといえることができよう。本来、いかなる時代の人の目にも、自分自身が生きている時代の文化ないし思想は、雑然たる渾沌として映りやすいものであるうし、ある一つの歴史的課題が解決された時代にいたってはじめて、それぞれの文化が、顧みられて、歴史的に位置づけられていくのが通例であろう。それにしても、この時期の文化の問題は、現在のわれわれにとって、特殊な意味をもっているように思われる。半世紀を経た時期の歴史といえ、あるいは一定の歴史的価値判断が通用し得べきだと考えられるかも知れない。ことに今世紀の歴史の発展の過程が極めて急速であるという点からも、そう考えるべきであるかも知れない。しかし、それにもかかわらず、われわれはこの時代を、少なくとも文化的部面では、

“現代”とどこかで画された“過去”と言いつてることができないでいる。政治史的には第一次大戦やロシア革命の時期が常識的には一応の画期とされるにもかかわらず、文化やイデオロギーの面では、“現代”はこの第一次大戦前の歴史的諸条件との、より強いかわり合いなしには過ぎえない多くの問題に当面している。むしろこのような状況であればこそ、われわれはこの時期について、たといそれが歴史“学”的には邪道であっても、いささか大胆な素描を行なわざるを得ない。正に、現実に対する学問の姿勢が問われはじめてのことこそ、この世紀の特徴であろうから」(注1)。

述べられている内容について、前章での考察をあらためて繰り返す必要はないであろう。“近代”から“現代”への変遷期が問題となる場合には、すでにフッサールがそうであったように、「思想」や「学」の体系としての破綻をも顧みることなくという、近代に確立された主観を超え出る視点が等しく要請されるのである。

歴史の発展過程は、それぞれの時代における発展と均衡との融合過程のうちに、その必然的な展開方向として瞥見されるのであって、個々の段階を実体化した継起的転換として把握されるものではないことはいままでもない。その際の変動要因である“階級”にしても本来は、諸個人の発展を前提に、「どれか他の階級にたいしての共同のたたかをおこなうことになるかぎりでのみ一つの階級を形成する」(注2)という形で提起された概念であって、その典型が最初から設定されているわけではない。動態的なその融合過程はウクラッドですらなく、おそらくここに近代ないし現代の、本来の姿を把握することの容易ではない理由がある。大躍進においてこの変革過程は、第1次5カ年計画期における拡散的な空間拡大という水平的

構造が否定され、それに対して垂直の、歴史的発展方向への全面的な転換によって押し進められるが、その成果である新式農具はそこに再び内部への空間拡大を実現し、個々の体系を横に貫ぬく全体の方向として、新たな次元での均衡体系を生み出していく。注目されるのは、ソ連型近代農業と伝統的農法の絶対化を否定して、前者より深耕実現の空間的側面、後者より精耕細作の時間的側面を継承し、両者を新たな体系に統合していく新式農具の求心的な性格である。この性格を生み出した源というべき、農法一般に固有の、その動態的な特質を見ていくことにしよう。

話は古く紀元前に遡るが、伝統的農法の定式は、要約つぎのような発展過程を経て確立されたものである。6世紀に『齊民要術』において基本的に完成された農法は、その前段階の前漢武帝時(B. C. 157~87)の「趙過代用法」と、前漢成帝時(B. C. 32~7)の「汜勝之区種区田法」を継承し、両者を統合して成立する(注3)。趙過代田法とは、無鋤の作条犁を使って3条の壟溝を作り、この壟と溝とを年々交替させることによって、従来の耨耕段階と比べて、休閒の解消、連年作付による耕地の拡大を実現する。無施肥・無灌漑地での、犁耕の導入、条播・耨をもってする耐旱農法を記述する最初の例とされている(注4)。汜勝之区種区田法では、この壟溝耕(うねたて耕)を平坦耕へと発展させる。代用法の休閒の部分(壟の部分)を廃することができたのは、耕起したあとを摩平し、攪擾層を形成することによって地沢の保存が可能となったからである(注5)。同時に区種区田法は、引水灌または負担澆水を必須として深耕・多肥・密植を行なう、厳密に量規定を受ける集約的な技法であった(注6)。

『要術』は、この発展過程における二つの側面を継承する。一つは犁耕の導入から深耕・多肥・

密植にいたる深耕の実現、他方はそれを補完しかつ規定する、厳密な「量規定」を受ける集約的な精耕細作である。区種区田法が当時の制約条件から傍地を多く残して耐旱作用をもたせたのに対し、『要術』にいたって、犁の強化・耕耘の深化、労技法の完成と普及(注7)によって、傍地をも耕地に転用することが可能となる。同時に、枠型犁の耕深が浅いことによる地沢保存の難点を、手鋤により表土を薄く削り、土くれを砕いて直ちに鎮圧する作業によって、除草とともに毛細管構造を切断し、水分の蒸発を抑えてこれを補なう(注8)。東アジアの農業を一貫する、労働集約的な「犁耕体系未展開」と規定される農法の完成である(注9)。

さきに大躍進における農法変革について、農法が発展と均衡の二方向に分解・対立した時期であるとしたが、『要術』においてこうした対立にいたる過程は、犁耕体系のそれ以上の発展が当時の畜力条件によって限界に達し、それを中耕除草段階での精耕細作が補完・代替する形、すなわち発展から均衡への転回が計られる形で解消する。「犁耕体系未展開」という規定に示されるように、農法の性格は、発展方向(深耕)と均衡方向(精耕細作)がどのように体系内に統合されるかによって決定する。しかも、農業機械化のうえに精耕細作の展開していく方向が農法に必然的な変革の道である。代田法と区種区田法からこの二方向を継承する伝統的農法の確立過程では、農村に既存の諸条件がその限界まで利用されるところから、発展方向の極限から、均衡への方向が生み出される。言い換えれば、発展の方向が追求され続ける限りで、均衡への方向も維持されていく。ここに、それぞれの方向の可能性が追求される分解・対立傾向の接点、両者の補完・代替関係の変動のうえに体系が存続するという、その動態的な特質を見出す

ことができよう。長い間伝統的という枠内にとどまってきたとはいえ、両者の間を絶えず揺れ動きつつそのたびに体系化の装いを新たにするといった、歴史の展開如何によってその性格を大きく変える可能性が、農法定式化のもともとの時点から孕まれていたと考えられるのである。

大躍進においても、以上に見られるのと同様の事態が生じる。農具改革運動は、58年7月にいたって突然、「創造は多いが、普及は少ない」という批判を受けた<sup>(注10)</sup>。「典型樹立」という方針が打ち出され、大躍進運動はこの時点を境に、均衡方向へと急転回していく。体系化の最初の段階を画したのは、人民公社規模に合わせた農具の製造・修理工場の建設、および農具集配網の整備である。農法発展の結晶ともいえるべき、その方向が実現され具体化された個々の新式農具を頂点として、それらを横に貫ぬいての均衡の方向であった。農法自体としては、58年実験段階にあった深耕・多肥・密植の試みが、年が明けて全面的に実施に移される。この場合には追肥や中耕除草など、およそ一株ごとへの集約的な田間管理作業が必須となる。

運動初期とはまったく逆の、この大きな転換の意味と具体的内容については今後の課題としなければならないが、前述との関連でいえば、新式農具の導入の不可能なほどに空間が緊密化され、体系における時間的側面がきわだって強く現われた時期である。その後の農業大災害という不測の事態もあって、こうした過度の集約化については、大躍進の試みそのものが失敗であったという評価を一般的なものにした。しかし大躍進期全体を通して考えてみれば、こうした結果に帰着する展開は、逆にその前段階における農具改革運動の成功だったことを証するに他ならない。この時点で、発展から均衡への必然的な転回が生じたのであ

る。一般に大躍進の試みは、伝統的農法に内包されてきた基本的な要因がばらばらにされて継起的に展開していくという、時間の流れが遅くなったとでもいうような興味ある性格を示す。過程の一つ一つの可能性が徹底して追求された結果と考えられるが、したがって大躍進について、すでに確立されている体系の観点からその判断を下すのは、まして失敗であったと評するのは早急に過ぎよう。均衡への方向は、発展過程がその極限まで追求され実現されたうえに、その展開過程の内部から発生してくるのであって、外来的に規定されるべきものではない。そこに均衡への方向が生じてこないとすれば、発展の方向についてこそ、それが傾斜したものでないかどうか問われなければならないのである。

この発展の方向とは、単位収量増大という、体系の内部へと向う空間の拡大であった。一方、その空間を最終的に編成し完結させるのが、精耕細作の作業形態で現われる、空間を秩序づけ意味づける時間の流れである。深耕・多肥・密植の場合には、農法体系は垂直・水平方向に緊密化する<sup>(注11)</sup>。個々の農作業に要する時間が従来と変わらないとすれば、空間全体としての所要時間は長くなり、この変化に対応して、体系に固有の時間は新たな修正を受ける。個々の作業を合体する以上の、全体を系列化し一貫させる新しい次元での流れである。それまで奨励されていた農具改革が突然批判を受ける背景にはこうした時間基準の変化があったと考えられ、それに応じて新式農具の性格も変化していくのであるが、この点については次稿で問題にしよう。さて、こうして時間と空間が融合する場合、そこには“場”ともいえるべき<sup>(注12)</sup>、求心的なベクトルをもった閉じた領域が成立する。農法体系の動的な性格を以上に即して言い

換えれば、一方に内的な空間拡大を、他方に時間の流れを二側面として、両者を融合して揺れ動くということである。均質的な空間を設定するにも継続性が必要である。農法においては空間をさらに緊密化する。新たに生じた時間基準にそって農村の全体が包摂されていくとともに、体系は内部から支えられ、求心的な閉じた領域が形成される。農法を単なる技術体系とはしえない、一つの文化圏が成立するのである。

## 2. 新式農具のいくつかの事例

発展が閉ざされた領域として実現されるという以上のパラドクスこそ、伝統的農法がその定式以来、長期にわたって伝統的たるにとどまってきた所以である。農法については明らかに、そして二度の破局に陥る近代的発展の結末からすればおそらく普遍的に、傾斜したものではない本来の発展とは内へ向う空間構造をもつ。現代における残された課題の一つは、必然的に求心的な性格を帯びるその構造が、いかにして外部へ展開していく契機をみずからのうちに内包しうるかという問題である。ここに、閉じた領域としての伝統的農法に内包され継承されてきた発展の諸契機と農民の主体的契機の注目されるべき、今日的な背景がある。それらの内的な関連については次稿に予定するとして、ここではその具体的な事例を紹介しておくにとどめよう。一切の前提が無効とされる地点に立って、農民の見たものは一体何であったのか、についてである。

### ① 深耕型新式歩犁

新式畜力農具の一つである新式歩犁は、50年から57年までに195万8000台が普及<sup>(注13)</sup>し、大躍進においても在来犁改良のモデルとされた。たとえば、甘肅省天水県街子郷の大衆は、資金を集め、材料を集め、大工・鍛冶屋を集中して、一日のう

ちに旧犁を排して新式歩犁化を実現し、かつ10日のうちに車輻化を実現した。中共天水県委はこの郷の経験を全県に推し広げ、3月7日までに新式歩犁2万2000台を普及した<sup>(注14)</sup>。

新式歩犁で注目されるのはその前輪についてである。在来犁には前輪がなく、そのため犁体の安定を欠く。この点について熊代氏は枰型犁について関述するE・ウェルトの8点を引きつつ、つぎのように指摘されている。「とくに④（枰型犁が直輓 Joch・連結畜で牽かず、牽索または耕架つき曲輓 Orscheit で牽く）に示される点は、インド・マレー犁、鈎輓犁・初発のインド・ゲルマン犁の固定性にくらべて、枰型犁が揺動犁といわれる不安定性の最大要因であり、また⑧（犁刀と前輪を欠く）の無輓の点でも後発のゲルマン犁にくらべ“未発展性”を内包すると考える。枰型犁はほかの犁型にくらべ深耕性に欠ける点がここにある」<sup>(注15)</sup>。深耕すれば耕幅が広まって保水に難があり<sup>(注16)</sup>、また役畜の負担も大きくなるからである。

ここに指摘されている輓<sup>クビキ</sup>で、西洋犁が直輓であるのは牽引に馬を使うためである。馬は牛に比べて動きが激しいため、首についた輓の両端からそれぞれ屈伸自在な革帯が出て、その一本は前脚のうしろにかかる腹帯となり、他の一本は頸にまきついて馬の喉笛を押え、制禦がきかずに激しくひっぱるのを防いだ。9世紀後半から10世紀前半にかけて、この輓が改良されて近代的な頸環となり、これによって馬が全重量を投げかけて引っぱることが可能となる。同時に縦列のつなぎ方も発明されたという<sup>(注17)</sup>。中国では馬が使用されることはなく、直輓へ展開するための契機ははじめから存在しなかったのである。枰型犁が直輓でないもう一つの理由は、<sup>ナガエ</sup>輓の負担を耕牛にかけないためと考えられる。改良すべき在来犁の例としてつぎの

ような指摘がある。「甘肅には、1500年の歴史をもつ生産用具がある。“二牛抬槓”である。(中略)犁轅が“T”字型をした大きくて重い耕犁で耕耘時に2頭の牛が前面の太い丸太を持ち上げて前進する」(注18)。この犁は敦煌千仏洞の北魏時代(386~534)の壁画に見られるとあるが、「二牛抬槓」については天野元之助氏の詳しい考証があり、漢代にまで遡る(注19)。その図(山西平陸漢墓の画像石)を見ると、T字型の轅は二牛の背にかかる。

深耕化としては、53歩犁のうしろにつける深耕鏟が紹介されており、耕深が3センチ以上深くなるという(注20)。犁体は双鏟犁改革例と同じになり、さきに指摘したように大躍進の深耕犁について、双鏟犁と在来犁からという二つの系譜のあったことを知る。またつぎのような例がある(注21)。

河南省長葛県先進第一農業社の王玉順ら6人は、8吋歩犁を改良して、その后面に耕深10.5センチの鏟犁式の鏟を装した。主鏟犁の耕深が22センチだから、一般には33センチ、最大で40センチの耕深が得られる。また、河北省唐県拔茹郷の場新科は、7吋歩犁を利用して、その后面に鋤型の鏟を装した。犁型は王玉順のものと同じである。鏟には取手がついており、耕やしながら随意に浅深を調整できる。最大深度は46.2センチに達し、2頭の牛の牽引で1日4畝の深耕が可能という。

この「鏟」については、元代の『王禎農書』(1313年刊)につぎのような記述がある。「柄長数尺、刃巾四寸ばかり。両手でこれを持ち、前進して投げ捨てるように用いて壠の草を<sup>カス</sup>刈り取り、その根を覆う。特に敏捷を号して、いま営州の東、燕蘇以北の農家・種<sup>タネ</sup>構田者みなこれを用う」。じ(ふみすき)系統に属する鋤具で、それが犁に装された場合に現在の「剗子」となる。後者の「鋤型の鏟」とは、『王禎農書』に、鋤の如くして<sup>カス</sup>關く

一牛小型犁に装する、とある除草具「剗」と同じものと考えられる。現在の剗子に統合される両者の系統の違いについては、次稿に、「三齒耘鋤」との関連で取り上げる。

## ② ロープ牽引犁

畜力の限界を乗り越えるために、58年9月から10月にかけて、秋耕のためのロープ牽引による犁耕が奨励された。最初は深耕犁をそのまま利用したが、ただちに犁轅を取り去り、犁鏟を前後に合体させて、両方向への耕耘が可能な形に創型される(注22)。電力・人力(4~6人)・畜力・船の動力などを利用して、畦上でロープを巻き取る(注23)。このロープは牽索を長くしたものと考えられ、枠型犁体系に独特の展開形態である。

犁を人力で牽引する例は明代に始まり、「代耕架」と名づけられた。ただし歴史的には、「清の中葉ごろ一時推广されたものの、やはり代用品に過ぎず、牛荒時の急場の役割を果たしただけに終わったようである」(注24)という性格をもつ。その図を見ると、同じく枠型犁の轅を取り去り、一人が扶犁、両側でロープを巻き取る形式である。

## ③ 拔綿花稈犁

さきに取り上げた劉恒傑はいくつかの畜力中耕機を考案しているが、なかでも注目されるのは小型犁に変型の鏟を装した、綿稈の刈取り、株根の堀り起こしに使用する一種の剗子の創型である(注25)。山本秀夫氏の紹介によれば、「棉花の棉柴(棉稈または棉茎)の收穫も現状では人力にたより、その收穫が遅れると秋耕時期をはずすことになる。最近(64年)、中国農業機械化科学研究所で、この種の新しい機械の試製が成功したという。これはトラクターの後部にかけるもので、1時間当り7~9畝の棉田の棉柴を收穫し、人力で引き抜くよりも約25倍の効率をもつ。すでに、河

南省商丘農業機械廠で少量の生産をはじめている」(注26)。その試みには、十分の必然性があったのである。

伝統的農法にその由来を求めれば、『王禎農書』の「麗刀」に行き着く。荒地を開く刃で、短鎌のようでしかも背が厚く、蘆や葦の生える荒地の犁耕の前に、一牛小犁に刃を置いて地を裂き、しかるのちに犁鎌(スキサキ)が随う、という。あるいは、「本犁の轅首の裏あたりにこの刃を置く」と。こうなればもはや、近代犁の犁刃である。

#### ④ 木製築畦器

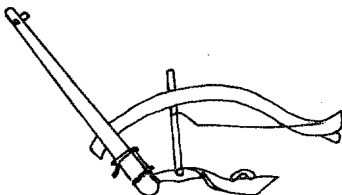
耕地の壟立てに使用し、2枚の木板を前部を広くして並べ、役畜に牽かせて耕土をもり上げていく農具。つぎのように紹介されている。

この築畦器の利点は、畦がまっすぐで、粗密が均等、畦面が平整、澆水が均等に流れ、品質良好、効率高く、役畜に牽かせて10時間で80~120畝の壟立てができ、人力の16~20倍の効率がある(注27)。

これは、劉恒傑の創った「加梁機」と呼ばれる麦田壟立て用の新式農具と同種のものである。ただし「加梁機」は、上部に澆水田の漏斗を備え、木板の前部にそれぞれ地を裂く刃が装してあり、工夫の跡が見られる。

これらの壟立機は、解放前満州で使用されていた。「壊種(壟台を犁き割る)」の際の覆土に使用された「拉子」(注28)と、その構造が同じである。その機能を、壟を立てるまで高めたものと考えられ、その前提として耕耙過程の細深性が要求される。

第3図 拔綿花程犁



(出所)『人民日報』1958年3月31日。

#### ⑥ 快速收穫機

58年6月頃から、小麦收穫用の手推式收穫機の創型・普及が、広東・江蘇・福建などの水田地帯で進められた。小麦にはすでに実用化され、水稻にも試験中で、2~3人で1日水稻15畝、鎌に比べて10倍前後の高率という(注29)。さまざまな型が見られるが、刃を内側に向けて狭く配し、その間を通して小麦を刈取り、さらに刈取った小麦を受けとめる装置のある点で共通する。

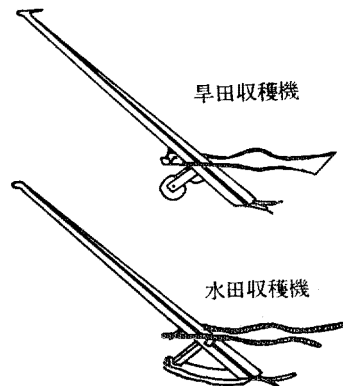
この先例は、すでに『王禎農書』に記載されている。鎌の刃をY字型の枝木の先に装し、両輪をつけたもので、「推鎌」という。

#### ⑥ 刨薯機

薯を堀り出すための犁で、河北省滄県の農具試製工場で創型されたものは、3枚の小さな鍬がわずかの隙間を残して三角鍬をなすように組合わされ、両側の鍬が土を分けると同時に、中間の鍬が薯を堀り起こす。手元で耕深を随時調整し、50センチまで刺土可能。4輪を備え、地を翻するにも使えるという(注30)。

注目されるのはその体型で、翻地の機能とともに、解放前東北で使用された「壊耙」に酷似する。

第4図 快速收穫機



(出所)『人民日報』1958年9月16日。

第 5 図 推 簾



(出所) 明刊『王禎農書』。

「播溝をつくる農具で、榆材で木杵を組み、両脚は前年の壟溝内を滑走させ、杵木の間中部に櫟子を取りつけ、それよりもやや斜前方に壊肥心子(心臟型の鑄鉄製鋒)を付した柄(柞または杏材)を装置し、これに播溝の浅深を調整する壊梭子を付す」。耕深は約5センチ、東北で盛んに用いられ、河北省は冀東地区で行なわれたという(注31)。

同種のものに双輪双鋤犁の犁体を利用した例がある。両輪を残し、犁鋤の代わりに鋤を装す(注32)。

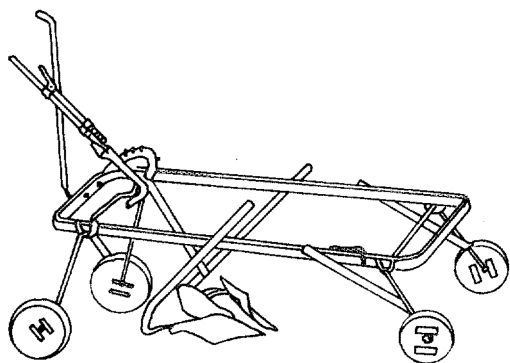
#### ⑦ 車土水車

唐代に普及を見た揚水のための「竜骨車」より着想を得て、江西省豊城県袁渡公社の劉芳九が創出したもので、竜骨のそれぞれに土を乗せる箱を装し、さらにその箱に車をつけて木製の軌道の上を走らせる(注33)。水利建設現場の土砂を、堤の上まで運び上げるのに使われた。

#### ⑧ 插秧船

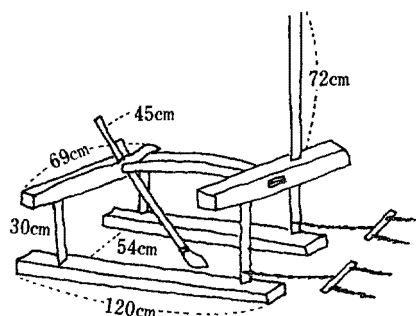
大躍進での最初の事例は、広西僮族自治区横県

第 6 図 刨 薯 機



(出所) 『人民日報』1958年9月26日。

第 7 図 壊 耙

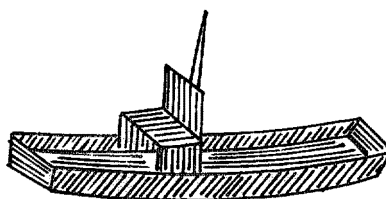


(出所) 天野元之助『中国農業史研究』。

圭壁農業社で創製されたものとして、4月の段階でその紹介がある。前部に肥料を積み、後部に苗を置き、中央に坐し、足を水に入れて苗を植えていく(注34)。歴史的には宋代から解放後にわたって、「秧馬」の名で農民に広く愛用されてきた農具である(注35)。

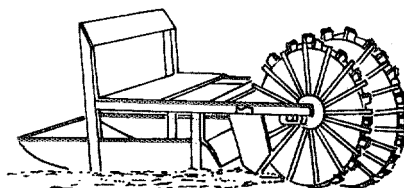
のちに定式化され、精巧なものへと発展する插秧機(田植機)は、この插秧船から生まれたものと考えられ、それを証する初発の形を図示しておく。

第 8 図 插 秧 船



(出所) 『人民日報』1958年4月24日。

第 9 図 船 型 插 秧 機



(出所) 『人民日報』1958年6月2日。

(注1) 江口朴郎「帝国主義時代の……」409—410ページ。

(注2) 「ドイツ・イデオロギー」50ページ。

(注3) 熊代 前掲書 589—590ページ。

(注4) 同上書 614ページ。

(注5) 西山 前掲書 76—77ページ。

(注6) 熊代 前掲書 604—605ページ。

(注7) 西山 前掲書 83ページ。

(注8) 同上書 96—97ページ。

(注9) 熊代 前掲書 303ページ。

(注10) 『人民日報』1958年7月3日。

(注11) 垂直方向の場合、空間は物理的には外部へ拡大する。しかし、その拡大は従来の耕起作業の積み重ねと同じ内容を持ち、農法体系のもつ空間としては緊密化する。

(注12) 物理学における「場の理論」の社会科学への導入にはゲシュタルト心理などの先例があり、こうした理論的側面については現在検討中である。関連するメルロ＝ポンティの「知覚の理論」ともあわせて、課題の一つとしておきたい。

(注13) 『人民日報』1958年1月30日。

(注14) 『人民日報』1958年3月31日。

(注15) 熊代 前掲書 467ページ。

(注16) 同上書 339ページ。

(注17) R・J・フォーブス『技術の歴史』岩波書店 1973年 109ページ。

(注18) 『人民日報』1958年3月31日。

(注19) 天野元之助『中国農業史研究』農業総合研究所 1962年 738ページ。

(注20) 『人民日報』1958年4月7日。

(注21) 『人民日報』1958年9月12日。

(注22) 『人民日報』1958年9月29日。

(注23) 『人民日報』1958年9月10日。

(注24) 天野 前掲書 731ページ。

(注25) 『人民日報』1958年3月31日。

(注26) 山本 前掲書 164—165ページ。

(注27) 『人民日報』1958年3月20日。

(注28) 天野 前掲書 804ページ。

(注29) 『人民日報』1958年6月25日。

(注30) 『人民日報』1958年9月26日。

(注31) 天野 前掲書 793ページ。

(注32) 『人民日報』1958年10月28日。

(注33) 『人民日報』1959年12月17日。

(注34) 『人民日報』1958年4月24日。

(注35) 天野 前掲書 234—238ページ。

## おわりに

歴史的変革過程に内在するさまざまな問題を顕在化させる大躍進運動について、本稿ではそこに現われる顕著な特色、①「現代化」の提唱、②58年7月を境に発展から均衡へと急転回する農法変革の試み、の二点に着目し、一方は“近代”の性格、他方は伝統的農法定式化の歴史過程について、思い切って視野を拡げていく懸案の課題を取り上げた。

第一点は、大躍進運動を現代史の中に位置づける試みであり、“近代”を超克する限りで“現代”たりうるという同時代史的な性格についてである。さきに見たようにその超克とは、何らかの“理想型”を設定して、それによって“近代”を否定していくということではない。“近代”を“遅れたもの”として排除していくということであれば、結局それは近代合理主義をそのまま踏襲する過程に他ならない。「現代化」への方向はそうした思考方法をも含めて、すでに確立している前提を全面的に否定していくところから出発する。否定の論理におけるその前提、そこにおける“近代”からの系譜こそが根底から覆えられていくのである。

第二点はその具体的な内容である。ここから農法変革について、発展方向と均衡方向との融合過程として動態的に把握さるべきという観点を提示したが、この立言については、さらに継続的な検討が必要である。

本稿の視野を集約していく、均衡の側面が強く浮かび上がる大躍進後期を考察する際の課題であるが、この「試行」がはたして「錯誤」の域を超えるかどうか。しばらく資料の整理に専念する予定である。

(調査研究部)